

「学び」の多様性、それを支える仕事に求められる専門的な力、そしてその面白さ

私たちは、生まれたときから死ぬまで、ずっと学んでいます。しかもあらゆるところで学んでいます。自分がこれまで歩んできた道のり、あるいは今の生活を振り返ると、自分がどんなところで学んできたか、学んでいるか、その場面がさまざまに思い浮かぶのではないのでしょうか。またあなたの身の回りの人たちも、さまざまところで、さまざまな形で学んでいるのではないのでしょうか。その「学び」には、文化活動もスポーツも入ります。

このような人々の学習・文化・スポーツ活動は、一人で行うだけでなく、集団で、お互いに刺激あい、支え合って行われることも多いでしょう。

ところで、こうした人々の学習・文化・スポーツ活動を支えることを仕事として行っている人がいます。それが社会教育職員です。

そこで社会教育職員は、まず、人々の学習・文化・スポーツ活動のあり方をよく知らなければなりません。また、そのような活動をする人々をどのように支えればよいか、常にその仕事のあり方を考え、工夫していかなければなりません。

また、社会教育の仕事はまさに教育の仕事ですから、その仕事の質を高めるには、支える対象である学習・文化・スポーツ活動を行う人たちといっしょになって、その仕事のあり方を考え、深めていかなければなりません。決まりきったことは少なく、どんどん発展させていくことができます。その中で自分が人間としてどんどん鍛えられていくこととなります。

常に周りに関心をはらい、興味をもち、他者からどんどん学んでいこうとする積極的な姿勢もっていること、他方で、人々の一人ひとりの心に配慮しながら、人間とはどうあるべきか、ということ深く考えていくことができること、そういうことが期待されます。

大変な仕事で、一生かけて自分の人間性ととも、その専門性を磨いていかなければなりません。それだからこそ魅力的な仕事だともいえます。**自分が支えた人々が、自分と一緒に、生き生きと変わっていく姿に何度も出会えるのは、この仕事の醍醐味でしょう。**

そこで、このような仕事が面白いと思い、意欲と力をもつ人にその仕事に着いてもらうために、資格制度がつくられています。社会教育主事、博物館学芸員、図書館司書という資格は、**そのような仕事を担う人のために考えられた資格制度です。**

なお、これらの資格の中には、社会教育施設で人々を支える仕事と、施設や職員の配置など、さまざまな学ぶ条件を教育委員会による教育行政施策の一つとして担っていく仕事とが混在しています。社会教育主事の資格はこのような社会教育行政を担うための資格ですが、その運用実態には工夫があり、今年度から新しいカリキュラムになって、さらにその運用に変化が起こる可能性があります。

人々の学習・文化・スポーツ活動は型にはまらないさまざまな可能性をもっています。そういうことに興味がある人は是非いっしょに学んでいきましょう。社会教育の資格を取得しながら、この資格を生かすことができる社会教育という仕事のあり方、そしてその資格を生かす場を開拓する方法も、いっしょに考えていきませんか。

社会学部教授 荒井容子